

監修の序

小児医療は疾患の多様性や年齢に応じた異なった対応の求められる複雑な領域である。子どもの成長や発達は人類に大きな夢をもたらすものであり、それにかかわろうとする医療者にとって避けて通れない複雑さでもある。

昨今の医師不足や国民医療費の抑制策は各所で医療崩壊を招き、小児医療もその大きな流れに飲み込まれる寸前にあった。それを踏み留まらせているのは子どもの命の大切さに思いを寄せる医師や患者家族、そして国民の良心に他ならない。医学教育のなかで「愛」の大切さを高らかに唱えることができるのはまずもって小児科学であることがこの分野の特性を物語っている。

本書は小児に投薬する可能性のあるすべての医師ならびに小児科研修医、専門医を対象として編纂されている。多様な読者層を意識して、処方量や重要な情報をわかりやすく提供するとともにそれに付随する情報や根拠も各所にちりばめられている。基礎編、薬剤編、症候編の3部構成になっている所も他書にない特徴といえるであろう。小児科学会専門医資格取得のための改訂版到達目標なども参考に編纂されており、小児科専門医をめざす若手小児科医のみならず小児に投薬する可能性のある臨床医にとって必携のハンドブックとしても大いに役立つであろうと考えている。

2011年7月吉日

東京医科歯科大学医学部附属病院小児科
水谷 修紀

編集の序

このたび羊土社から、“小児の治療薬”に関する実用的な解説書編集の依頼をいただいた。小児の治療薬は、対象患児の年齢、体重や疾患重症度などにより投与量が異なり、成人のように1錠または1アンプルが1回の使用分になっているわけではない。しかも小児にとってはオフラベル（適応外使用）の治療薬が非常に多く、どこまでどのように投与してよいのか悩まされることが多い。さらに小児医療は数年前から崩壊の危機にさらされており、子どもたちの両親が望んでいる24時間体制の専門的小児診療の供与は、日本全国いたるところで破綻をきたしているのが現状である。

以上のような現在の日本の小児医療体制のなかでは、専門医と一般医の相互連携や地域連携がいかに重要かは言うまでもないが、実際的には小児科専門医以外の医師の皆さんにも、適切な“小児の治療薬”を理解していただき、そして臨床現場でそれを活かしていただくことが望まれている。またそのために以前よりわかりやすい“小児の治療薬”の本が待ち望まれてきたわけであり、本書はそのようなニーズに応えられるよう、構成には最大限の注意を払い、ポイントをついた解説書として編集できたことに満足している。

本書は、小児科専門医以外の皆さんのみならず、小児科専門医を志す若手医師や、将来の定まっていない初期研修医の皆さんにも大いに活用していただくために、1つ1つの薬の薬の解説を充実させ、実践的な内容となっている。薬剤編では、治療薬の薬用量を一目でわかるよう、統一した表形式で各項の最初に掲載した。続いて実際の投薬に際して、薬剤の特徴、作用機転や副作用なども掲載し、より実用的に編集した。症候編では疾患の病態生理の理解を深めることを第一に、そしてより実用的なものになるよう症例を提示しながら薬剤の使用法に関して詳細に解説した。

薬の開発や新薬の登場は、将来的にも大いに期待されることであり、小児への適応薬剤が増えていくものと期待するところである。本書の完成は1つの始まりにすぎず、今後大きく変貌してゆくであろう小児医療の変化に対して、迅速に対応しながら、読者の皆さんの最高の座右の書として在り続けられるよう、今後も努力を重ねていきたいと考えている。

2011年7月吉日

東京医科歯科大学大学院
小児・周産期地域医療学
土井 庄三郎